

重複障害児に対するサポートブックを使った支援と 在籍校（通常の学校）での6年間の交流を振り返って

比嘉 展寿*・安部 博志*・田丸 秋穂**・城戸 宏則***

本研究では、重複障害児に対し、知的障害と肢体不自由教育の専門性を生かしたサポートブックを作成し、その活用方法を検討する。サポートブックは小学部から中学部（他校）へのスムーズな支援の引き継ぎ（移行支援）を進めるツールとなるものである。在籍校である通常の学級の子どもたちとの関わりのきっかけとなり、交流を進めることを目的とした、「お友達用サポートブック」も併せて作成した。「移行支援用のサポートブック」は移行先の肢体不自由特別支援学校の中学部で実際に活用されたが、いくつかの改善点が指摘された。また「お友達用のサポートブック」も実際に教室で使用された。本研究は6年間の連携研究の最終年度に当たるため、この間の在籍校（通常の学校）での交流を振り返り、子どもたちが書いた作文等も併せて掲載する。

キー・ワード：サポートブック 移行支援 交流

I はじめに

本研究は、大塚特別支援学校（知的障害）が地域の小学校や桐が丘特別支援学校（肢体不自由）との連携により、知的障害と肢体不自由を併せ有する重複障害児に対して行った連携研究の最終年度に当たる。これまで松原ら（2006）や、安川ら（2008）（2009）による知的障害児養護学校と肢体不自由養護学校の連携などが報告されてきた。対象児は公立学校に在籍し、大塚特別支援学校（知的障害）の小学部に6年間通級してきた。中学部からは地域の特別支援学校（肢体不自由）の中学部への転校を希望している。そのため、小学部から中学部（他校）へのスムーズな支援の引き継ぎを進めるツールが求められた。また在籍校（通常学校）での交流をより進めるため、通常の学級の子どもたちとの関わりのきっかけとなるようなツールも併せて検討した。

本研究では重複障害児に対し、知的障害や肢体不自由教育の専門性を生かしたサポートブックを作成し、その活用方法を検討することを目的とする。

II サポートブックとは

サポートブックは使用目的により様々な形態や使い方が考えられる。今回紹介する「サポートブック」は、いろいろな支援の際に支援者に利用してもらうために携帯型の冊子とした。内容は障害のある本人の特性やコミュニケーションの取り方、さまざまな場面での対応の仕方などを具体的に、見やすくまとめたものである。

III 作成したサポートブックの特徴

小学6年生の重複障害児のA児に対して、「移行支援用」と「お友達用」の2種類のサポートブックを作った。どちらのサポートブックも記載する情報を絞り、利用する支援者が見て分かり易いもの、つまり、16～18ページ程度の短時間で読めるものを作成した。

「移行支援用サポートブック」は、小学部から中学部（他校）への引き継ぎ用で、使用期間を新学期が始まって2～3ヶ月と限定して考えた。移行期に必要なと思われる情報を絞り込み、一日の生活の流れに沿った形で項目や順番を配置した。さらに各ページに大きな余白を設け、「訂正情報」、「新しい発見」などを書き込みやすくし、臨機応変に改訂ができるような工夫をした（表1）。

「お友達用サポートブック」は、交流を進めるツールとして役割を持たせたいと考え、A児と関わる子ども達と一緒に遊ぶ場合のヒントや困ったときの対処法、疑似体験として車いすから見える風景の紹介、車椅子の操作のポイントなど、対象児をより深く理解し、楽しく、安全に関わるための具体的な内容を盛り込んだ（表2）。なお、どちらのサポートブックも肢体不自由の特別支援学校（筑波大学附属桐が丘特別支援学校・筑波大学特別支援教育研究センター）の教師から作成の際にアドバイスを頂いた。

* 筑波大学附属大塚特別支援学校 ** 筑波大学附属桐が丘特別支援学校 *** 筑波大学特別支援教育研究センター

表1 移行支援用サポートブックの特徴

- ①使用期間を移行期に限定
- ②情報も移行支援に必要なものに限定
- ③余白を多くして書き込みやすくした

表2 移行支援用サポートブックの特徴

- ①通常学級の子ども達との交流を進めるツール
- ②関わり方のヒント集
- ③疑似体験、障害理解の深化を期待

表3 移行支援用サポートブックの項目

- 表紙
- 一日の流れ
- 健康や注意事項
- トイレの介助方法
- これまでの学習や注意事項
- コミュニケーション方法
- 好きなこと
- 食事介助の方法
- 外出時の注意点
- 緊急連絡先
- サポートブックとは
- メモ欄

Ⅳ 作成したサポートブックの具体的な内容

1 移行支援用サポートブック

移行支援用サポートブックで取りあげた内容は表3の12項目である。

これまでサポートブックの問題点として、多くの時間をかけて作ったのに引き継ぎ者に全然見てもらえない、現場で活用されていないなどの例がよく挙げられる。これらの問題を解決するため、今回のサポートブックは、多くの情報の中で移行期に必要な情報だけを絞り込み、個別の指導計画のように十分な情報を網羅したものにはあえてしなかった。それにより意図的に引き継ぎ者に加筆してもらおうチャンスが増えることを期待している。さらに全てのページに大きな余白も意図的に設け、普段の生活の中で気づいたことをすぐにメモできるように工夫した(図1)。新しい支援者が余白部分に加筆することによって、愛着が持てるオリジナルなサポートブックが簡単に、短時間で作れるメリットを持たせたいと考えた。

サポートブックは、見開きで一つの支援項目がおおよそ理解できるようになっている(図2)。ページの右側に支援者に特に伝えたい情報を分かり易く簡潔に表示した。さらに文字の上には○×式のマークを付け、その情



図1 余白を大きく設けたページレイアウト

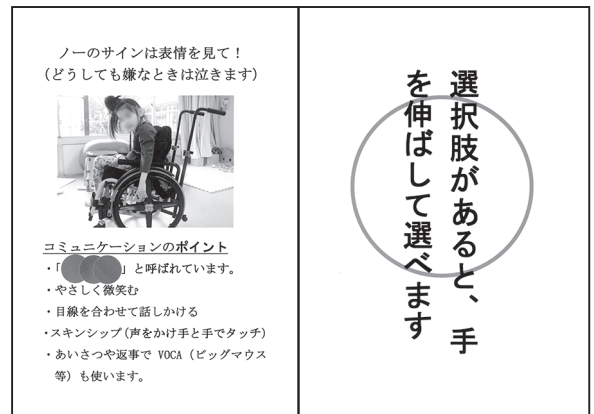


図2 見開きで一つの支援項目を表示する

報を一目で理解できるように工夫した。ページの左側には、介助の際に必要なポイントを数行の箇条書きで記述している。

12の各支援項目の順番は一日の生活を時系列に配列し、支援者がサポートブック使用する際に利用しやすい内容配列になっている。さらに検索がしやすいように、各ページには見出しのタグをつけ、すぐに目的のページが探せるように工夫した。

食事の引き継ぎは多くの情報を必要とする。そのため、食事形態や摂食の細かな注意事項等は移行予定の特別支援学校で使用している実態表をそのまま載せた。この中には26項目のチェック欄があり、食事の際に注意する事項が文章で細かに記述されている。そこで、サポート

普通食です。食事前半は自分でスプーンを使って口に持っていく部分介助、後半は全介助です。



座位保持いすとカットテーブルを使います

図3 食事場面の簡単な説明と写真

5分ほど便座に座ってがんばります。



使用するとオムツの交換時に使うベッドです。

排泄のポイント

- ・朝の定時排泄は9：20頃です。(11:00、13:00にもそれぞれ定時排泄)
- ・介助者は座る姿勢や閉じている股の開き具合を介助してあげます。
- ・水鉄砲でおちんちんに水をかけるとおしっこができることがあります。

図5 トイレ介助でのポイント2

オムツを使っていますが、洋式トイレを使っています





図4 トイレ介助でのポイント1

ブックには図3のような簡単な説明文と、食事姿勢、カットテーブルや座位保持椅子の写真などを載せ食事のときの様子をイメージしやすいようにした。その他にもトイレでの介助についてのポイント(図4、図5)や自立活動、その他の学習活動における健康上の注意点や、これまで

紙芝居などは教材の真ん前に座らせる、教材を視界に入りやすくする工夫で、集中力が高くなります。

教材提示の仕方




扉に紙石を内蔵させ、メタルボードの腹の上下左右に線をくっつけ、それを巻く。空間認知を高める。

排泄のポイント

- ・車いすに座わらせる、あぐら座で抱きかかえるなど、教材によって座る姿勢を調整して、自発的な手の動きを自由にしてあげてください。

スライディングブロック


(手の運動を方向づける。なめらかな運動を学び直し、空間形成の認識を作る。上、下、右、左の方向に動かせる。)



横方向へのスライディング 縦方向へのスライディング

リング抜き、缶入れ

(リングをつかんで特定の位置で差し、手指の運動の調整や特定の位置に手を押っていく力を高める。目で見てしたことを確かめる。)



大きなリングを抜く 小さいリングを一定の位置に差しこめる

図6 これまでやってきた学習の紹介

やってきた学習の紹介(図6)なども掲載した。特に指導場面の写真や指導のポイントを簡潔に示すことで、今までやってきた学習をスムーズに引き継ぎ、新しい学習へ移る際のヒントになるように工夫した。

2 お友達用サポートブック

「お友達用サポートブック」の内容は表4の12項目である。名前の通りA児の同級生やお友達が利用するためのサポートブックである。A児を支えるのは大人の支援者ばかりでなく、周りにいる多くの仲間こそ身近な支援者なのではないかという発想である。

サポートブックを利用するのは同級生を想定しているので、サポートブック内で使用する言葉や内容を小学生でもわかるように優しく表現してある。対象学年はA児

表4 お友達用サポートブックの項目

- ①表紙
- ②自己紹介
- ③A児とのお話の仕方
- ④好きなもの
- ⑤嫌いなもの
- ⑥遊び方
- ⑦車いす介助のポイント
- ⑧A児の目線
- ⑨こんなときどうする
- ⑩障害ってなあに
- ⑪A児がいてよかった
- ⑫サポートブックとは



図7 コミュニケーションの取り方

と同じ小学6年生を想定している。

A児は普段は特別支援学校で学習しているが、在籍は家の近くの小学校にあり、そこへ毎朝通っている。A児にとってはクラスの友達は小学校1年生の時から知っている顔馴染みの仲間である。しかし、普段の小学校での活動は朝の会への参加しかなく、子ども同士の関わり合いは極めて少ない。行事に参加するときも、遠慮ぎみに2～3人の友人が近づいてきて、手を握ることや挨拶をする程度の関わりしか見られなかった。そこでA児をさらに深く理解し、楽しく関わってもらうためのヒント集としてのサポートブックの作成をめざした。また、積極的な交流を進めていくために具体的な「コミュニケー

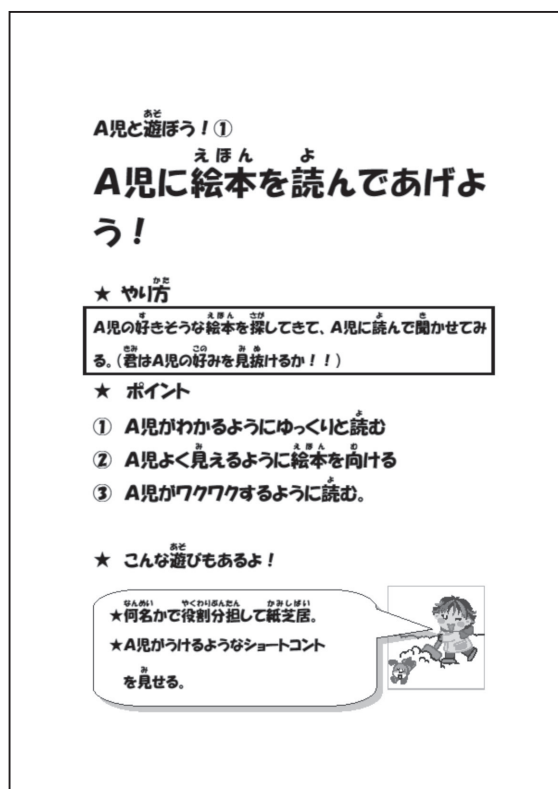


図8 A児との遊び方

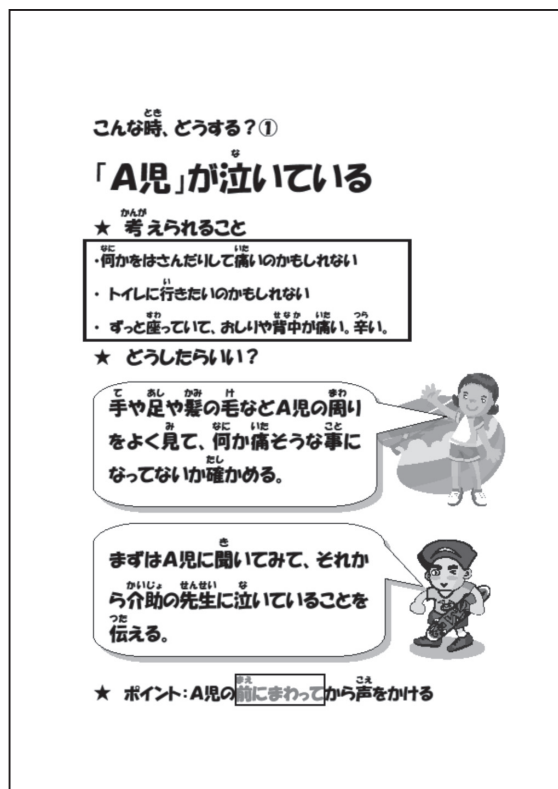


図9 こんな時はどうする？

ションの取り方」(図7) や、「遊び方」(図8) 「こんな時はどうする？」(図9) などの関わり方のヒントをいくつか示した。

障害の理解という点からはA児が普段見ている風景の「疑似体験」(図10) や「車椅子の安全な操作方法」(図



図10 車椅子の疑似体験

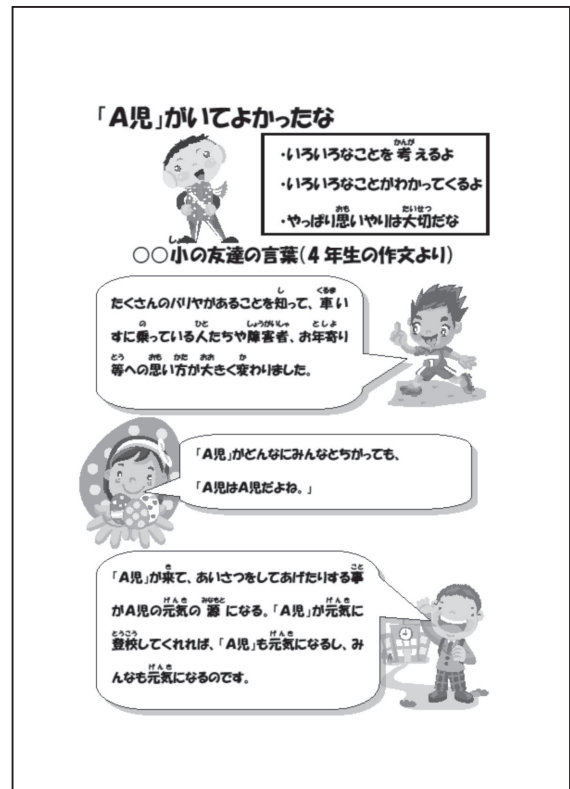


図12 同級生の感想文の抜粋

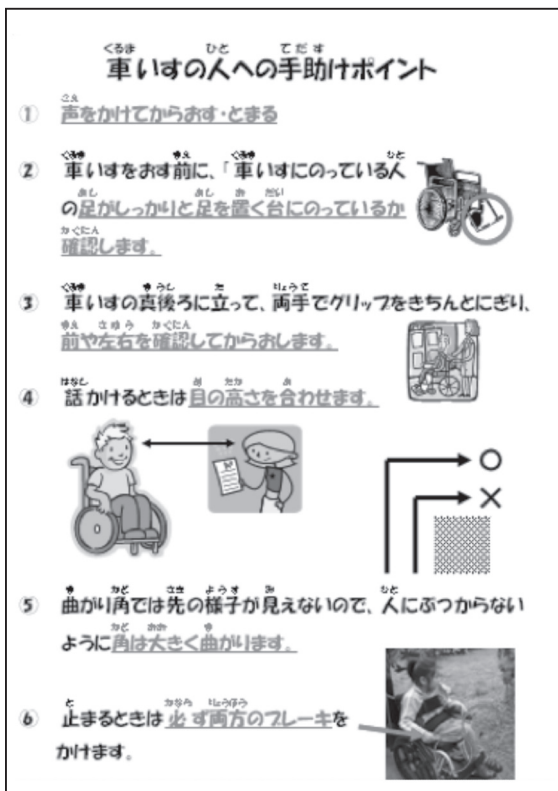


図11 車椅子の安全な操作方法

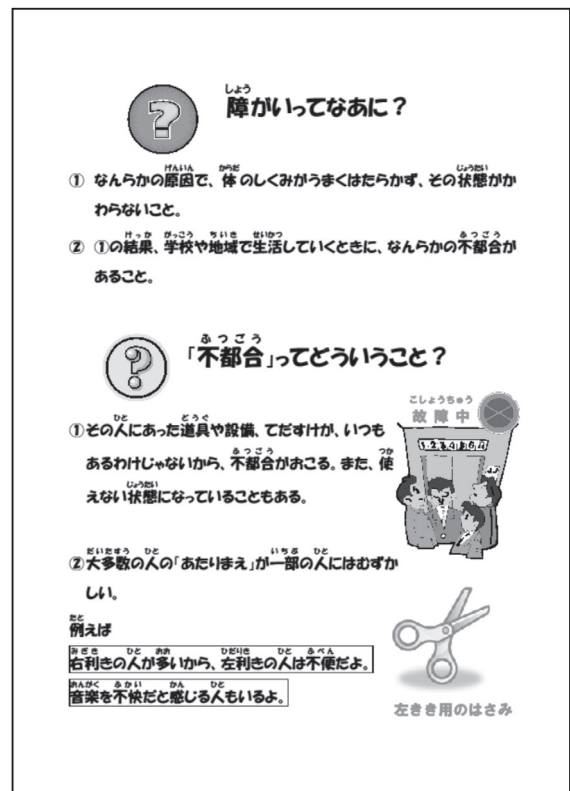


図13 近年変わりつつある障害観の説明

11)、さらに過去に行われた「A児についての特設授業」で書かれた「同級生の感想文」の抜粋(図12)や、近年変わりつつある障害観についての解説(図13)なども掲載し、障害について具体的なイメージと、正しい知識を身につけてもらう工夫も行った。

在籍校の学校長や担任の先生の許可を頂き、積極的に子ども達に車椅子に触れてもらう機会を増やしてもらった。「お友達用のサポートブック」も検索がしやすいように、各ページに見出しのタグが付けられている。

V サポートブックを使う理由

丸岡(2005)や佐藤(2006)、瀬戸口ら(2006)、服部・宮崎(2008)などこれまでにサポートブックは多くの場所で作られ、様々な形態で利用されてきた。また支援環境を整える協同ツールとしての有効性も示されている(武蔵・高橋 2006)。

一方で高橋(2006)はサポートブックを使わなかった場合に、支援者と支援される側と保護者の間でよく起こる問題点などを指摘している。例えば保護者は支援者にどこまでまかせてよいか、支援方法をどの程度伝えたらよいか迷い、遠慮しがちであること。また支援者も戸惑いや不安、保護者への遠慮でどこまで関わっていいのかわからないこと。そのような状況では情報の共有化は進まないだけでなく、支援方法のズレや誤解や混乱が生じやすく、支援を受ける本人も混乱や不安に陥りやすいことなどが挙げられている。

サポートブックは、今必要な情報を、短時間で、分かりやすく提示できるなどのメリットがあるが、その他にも多くのメリットがある。今回サポートブックを使った理由をいくつかを挙げてみる。

基本的に開示できる情報で構成されているので、多くの支援者に利用してもらえ、情報の共有化が進みやすい。

サポートブックに直接記入することができれば、色々な場所で、日々の情報の蓄積を容易に行うことができ、支援の引き継ぎに役立つ。

一冊の冊子になっているので、何処へでも持ち運びが容易であり、学校内で利用しやすい。

支援者がサポートブックの作成に関わることによって、「より深い障害理解」、「正確な実態把握」、「支援方法の明確化」などが要求され、確実に支援者のレベルアップに繋がっていく。

サポートブックは日常生活における情報の共有化を進め、保護者と支援者をしっかり繋ぐツールとして有効であり、それは支援される側にとっても安心な活動を保証

し、今の生活を楽しむゆとりを生み出す可能性がある。

VI サポートブックの使用の実際

今回作成された2つのサポートブックはどちらも実際に使用された。「移行支援用サポートブック」は移行先の特別支援学校で使用してもらい、4ヶ月後に担当の教師から以下の感想を頂いた。

(1) 最初はみんなで見て活用したが、4ヶ月もすると担当者以外は日常的には見なくなった。

(2) 支援内容の説明に○、×が付いているのは分かり易かった。

(3) チームで共通確認するツールとして役に立った。特に担当者は助かった。

また、改良点として以下の3点が挙げられた。①本人が発信するイエス、ノーのサインをもっと詳しく教えてもらえると良かった。②一日スケジュールは移行先の学校のものではなく、これまでの学校での一日の流れを記述してもらう方が、利用する側からすると参考になる。③摂食は担当者がサポートブックを読んで支援する時間的な余裕が無いことが多く、その場の状況に合わせての支援になることが多かった。

「お友達用サポートブック」は教室後方のロッカーの上に常設してもらい、4ヶ月間在籍校の教室に置いてもらった。サポートブックを持って行った時の子ども達の反応はよく、書かれている内容に興味を示してくれたが、その後どの程度の子も達が実際に読んでくれたか、またそれを参考にどのようにA児と関わったかの検証ができなかった。

VII 今後の課題

今回作成した「移行支援用サポートブック」は移行直後の2~3ヶ月の使用を想定していたので、この点については十分その役割を果たしたものと考えられる。

課題として挙げられた、本人の発信するイエス、ノーのサインについては、本人の表情の変化を見ることとしたが、初めて支援する人にとっては判断が難しく、表情の写真などがあると分かり易いと思われた。

一日のスケジュールは、時間割の調整などで年度によって変更があり、今回作ったものは活用できなかった。また、排泄や休憩の時間など、これまでの生活の流れが分かることが、移行先の新しい生活を始めるために必要であることが分かった。

摂食指導は一日の活動の中でも最も気を遣う場面である。A児の場合は配慮事項が多いので、サポートブックの役目として、食事の姿勢や椅子、机の形状、使ってい

るスプーンなど、写真などを使って、これまでの支援方法を一目で分かり易く示す必要があった。

「お友達用サポートブック」の導入においては、小学6年生の3学期は学校行事や受験などで忙しく、サポートブックについての感想などは得ることが出来なかった。サポートブックの紹介や定期的な観察など、年度初めからの計画的な取り組みが必要であった。

Ⅷ 6年間の交流を振り返っての同級生から送られた作文

A児は6年間、双子の弟が通う地域の小学校に登校し、その後、大塚特別支援学校で学習するという毎日を送ってきた。その中で小学校の運動会や様々な発表会などにも参加した。小学校の子ども達は、大塚特別支援学校の出前授業で、A児と一緒に車椅子で街に出て、街のバリアー（障害）の存在を知り、大塚特別支援学校でA児がどんな勉強をしているのかも学んだ。

いよいよ卒業が迫ったある日、同級生の子ども達から、A児へのメッセージが届いた。6年間の交流を振り返るものとしてその一部紹介する。

○ぼくは4年生の頃に、車いすに乗りました。その時、すごく怖くなりました。なぜなら、坂道を下る時、後ろの人がうっかり手を離してしまったりすると思うと、すごく怖いからです。ぼくは、最初A児は障害者なんだと思っていました。だから、A児は坂道が怖くないんだなと思っていました。でも、A児もちゃんと表情で気持ちが出ていたので、A児もぼくらと同じなんだなと思いました。

○はじめてA児に出会った時、車いすで移動しているのを見て「かわいそうだな」と思ったことがあります。でも、A児が、がんばってボタンを押すところを見て、かわいそうではなく、すごいなと思いました。なかなか動かない腕を、がんばって挙げようとするところを見て、すごいと思いました。それから、私はA児を、ふつうの子として接していました。これから中学校へ行って、もし、A児みたいな子がいたら、友達になりたいです。

○A児を最初に見た時、どうしたんだろう。なんで、車いすに乗っているんだろう。私はそう思ってしまいました。A児が急に大きな声を出すと、私はびっくりしてしまい、A児が怖かった時もありました。でも、A児の手をふれてみたら、やさしく返してくれました。その時は、すごく嬉しかったです。その時から、A児への恐怖心もなくなり、A児のことを大好きになりました。

○6年の時には、朝あいさつのボタンを押していつも「お

はようございます」と鳴らすのが楽しみでした。ぼくは前に、A児のこのビデオをみた時、車いすでも楽しくやっていたから、ぼくもがんばろうと勇気づけられたから、A児がいてよかったと思います。これからも、いっしょにがんばろうね。

○入学式のとき、はじめてA児に出会いました。はじめは、「何だろう、この人……。何もしゃべれないし、赤ちゃんみたいで変な人」と思っていました。でも、障害のことが分かった今では、あんなふうに思ってしまった本当に申し訳なく思っています。その人なりにはすごく大変なことだと思ったからです。そして、4年生の時からだと思いますが、A児用のボタンみたいなものがあった、それをがんばって押している姿をみて、すごいななと思いました。歩く練習もしていると聞いてびっくりしました。いろいろなことに挑戦しているA児は、えらいです。これからもがんばってくださいね。

○最初は、なんで車いすで、しゃべれないのかな、と思いました。けど、4年生の頃に、A児のお母さんがみんなの前で生まれた時から、どういうふう to 育ったりとか、A児の事を詳しく教えてくれたおかげでよく分かりました。最初は疑問が多かったけど、A児のことが分かったら、A児に対する気持ちが変わりました。あさ、A児が元気で手を挙げてくれると、ぼくも少し元気になって、やる気が出ます。元気がないと、「がんばれ！」という気持ちになりました。

○私は、いつでもA児に疑問を抱いていた。なぜ直接、養護学校に行かないのだろうと。そして、私は気づいたような気がした。それは、「何も障害のない人に、A児のような人の事を通して、いろんなことを気づいてもらいたい」と思ったのではないのかと。

○ぼくがはじめてA児に会った時、とても不思議に思いました。A児は車いすに乗っていて言葉もしゃべれなくて体に障害があったからです。しかし、ぼくは、A児から教わったものが二つあります。一つ目は障害のある人に対する考え方です。ボクは、A児を見て「なぜ、あのようになったのだろう」と考えるようになりました。「障害のある人に、どのように接したらいいのか」と考えるようになりました。とくに、接し方は「かわいそう」という考え方ではなく、「どうしたら一緒に生活できるのか」という考え方になりました。二つ目は命の大切さです。A児は体に障害があるにもかかわらず、一生懸命生きてる姿を見て、とても感動しました。今まで、ありがとうございました。

謝辞

本研究では、筑波大学特別支援教育研究センターの研究助成を頂きました。

本報告に使わせて頂いた写真や資料の掲載を快諾して頂いたA児の保護者や在籍校の先生方、また移行支援用サポートブックを実際に使用し、感想を頂いた東京都立北特別支援学校中学部の渡辺先生に感謝申し上げます。

引用文献

松原豊・中村晋・浅川達之・安達敬子・竹村洋子・安部博志・北村博幸・安川直史（2006）知的障害に在籍する運動障害を有する児童への支援－知的障害児養護学校と肢体不自由養護学校の連携－. 筑波大学特別支援教育研究, 第1巻, 10-17.

安川直史・中村晋・中村晋・杉田葉子・若林広太郎・吉井勘人・安部博志・中村敬子・加藤裕美子・松原豊・瀬戸口裕二（2008）知的障害特別支援学校における肢体不自由を併せ有する重複障害児への教育プログラム改善に関する研究. 筑波大学特別支援教育研究, 第3巻, 24-30.

安川直史・安部博志・田丸秋穂・城戸宏則・星祐子・瀬戸口裕二（2009）肢体不自由と知的障害のある重複障害児のコミュニケーションの評価－肢体不自由特別支援学校及び視覚特別支援学校の支援を受けて連携した指導－. 筑波大学特別支援教育研究, 第4巻, 8-12.

丸岡玲子（2005）サポートブックの作り方・使い方（障がい支援のすぐれもの）. おめでとう自閉症サポート企画.

佐藤暁（2006）見て分かる困り感に寄り添う支援の実際. 学研.
瀬戸口・安部・北村・安川（2006）子どもと家族を支える特別支援教育へのナビゲーション. 明治図書.

服部綾子・宮崎清美（2008）家族が作る自閉症サポートブック～わが子の個性を学校や保育園に伝えるために～. 明石書店.

武藏博文・高畑庄蔵（2006）思いっきり支援ツール. エンパワメント研究所.

高橋みかわ（2006）自閉症のサポートブック. 新風舎.